

# 至仏山



至仏山と名付けられたのも、宗教には全く関係なく、山名の由来は、東北から下るムジナツツの別名「波ッ沢」からきている。岩石は砂岩と粘板岩が主体であるが古生層と貫いた火成岩である橄欖岩が赤褐色をしているための別名で「波ッ山」が転訛したものと書かれている。

至仏山は何といっても、静寂を装う尾瀬原を置いた、正面 燧ヶ岳の眺望であり、北の平ヶ岳から上越の山々、上州の武尊山、日光連山と、360度の大展望である。

山の鼻への下山路は急斜面を下る。崩壊した岩石と赤土の混じる斜面は、誰でも滑って尻もちをつく。細心の注意力も、つらさがやむ。岩盤と埋まる塊石の上を、ただ黙々と下るのみである。沢で水を飲み、木道に入つてヤレ。

木道を歩きながら見渡す湿原は真夏の光を反射して明るく、ワザビ地帯にはヒツジグサが浮かび、小さな草花が咲き誇っている。至仏山荘前の売店は賑合、冷たい水が溢れる水槽にはジュースや缶ビールが客を待っている。

若干の登り下りを繰り返しながら、白やピンクのシクナゲの群落を分け、ゆるやかな登りも次第に急登に変わり、ガウガウの岩屑と岩塊を登り切り、大勢で埋まる山頂に着く。さわやかな風が汗を切って涼しい。

小至仏の手前で右のお花畑コースをとる。木道の両斜面は、案内のごとく草花が咲き出し、「遂に登った」という喜びが心を満たす。のどかな稜線とゆるやかな斜面、尾瀬を囲む周りの山々も顔をそろえ、今日のよりお天気を賛美している。

オヤマ沢田代で陶然とする余裕もなく、黒木の間を分け小至仏山の登りに入る。少し登ると、石コロと岩場の奥には、至仏山がドームのように見え、幽寂の漂う尾瀬沼が輝き始めた。

冷たい清水を飲んで朝食も終り、木段を登ると前方が開け、緑の湿原には、ワタスゲの白い穂が幻想的な霧意気を出している。湿原の水は美しくきらめき、草花も点々と咲いている。

木道を登ると大きな岩があり、ガヤガヤ大勢が朝食をしていた。太陽も快晴の空に輝き始め、夜行の眠気も消えて意気が上る。

東が明るくなり、足元が見えるようになったので、至仏山へのコースに入る。樹林の間の道は広くゆるやか、ウグイスの声に迎えられる木段を登る。40分で後部が見渡せ、尾瀬沼から立ち昇る霧に裾を隠した燧ヶ岳が、南画のように見え、尾瀬に来た感じが、実感として体内を巡る。